学生街を歩く①

◆関西大学・関大前通り（大阪府吹田市）

読売新聞記者　中西　茂

「学生街と言えば、やはり喫茶店でしょう」と口にすれば、世代がわかるというものだ。フォークグループ、ガロの「学生街の喫茶店」が大ヒットしたのは一九七三年。筆者はまだ地方の中学生で、学生街を知らなかった。その後、大学の教室にいるより学生街の喫茶店にいる時間の方が長いという自堕落な学生生活を送ったことを、先に告白しておく。

関大前通りを正門から望む

「学生街の喫茶店」の舞台は、東京のお茶の水らしいが、まず関西で学生街の喫茶店を訪ねようと思った。関西大学社会学部の岩見和彦教授が、大阪府吹田市の関大前通りを調査していたからである。

阪急千里線関大前駅から関大の正門までの通りは五百メートルにもならないが、岩見教授らの調査では、一九八三年、かいわいに喫茶店が二九軒もひしめいていた。「友達と話すならここの喫茶店、彼女と話すならあそこの喫茶店と、人によって、また状況によって訪れる喫茶店は異なっていたらしい」（関西大学博物館実習「関大前通りの風景展」資料から）という時代だった。岩見教授によると、喫茶店の数は八三年がピークで、その後は減少の一途。関大千里山キャンパスには約二万七〇〇〇人が通うが、いまでは一〇軒にもならない。

岩見教授が案内してくれたのは、教え子の店であるレストラン「ケープコッド」。八二年の開店で、八四年調査でここも喫茶店に分類されている。店を切り盛りする木村清子さんは、教授のゼミの謝恩会場としてここを選び、店を訪ねたのがきっかけでご主人と結ばれた。今回、ご主人には会えなかったが、清子さんは筆者と同世代には全く見えない若々しさ。ご主人のかっこよさも当時評判だったようだ。美男美女カップルのロマンス。学生街らしいエピソードである。

この通りの最近の話題は居酒屋チェーンの進出だという。「一三〇〇円、飲み放題」といった看板を見かけた。教授曰く、「今の学生は三〇〇〇円以上出さない」。この経済状況下では、学生が「安く飲む」ことは必須のようだ。

「昔の学生さんはよう飲んだ」というのは、「ケープコッド」の向かいにあるお好み焼き店「ヤネ」の経営者、矢根和子さん（七〇）だ。隣の晩御飯よろしく、木村さんに案内してもらって訪ねた。七〇年代の関大前通りを知る矢根さんによると、学生たちは仕送りが届く日を待って、お互いに飲み代を工面し合っていたという。かつては六畳一間の下宿屋も営んでおり、なぜか九州出身の学生ばかり何代も預かった。最近、三五年ぶりに、元下宿人を熊本に訪ねて再会したばかり。つきあいの濃さのたまものだろう。

　商店街を何度か往復するうち古びた看板を見つけた。案内役は大学広報課の北谷真理さんに替わっている。北谷さんも卒業生の一人である。看板はビルの二階にあがる階段わきにあって、「クラス会　サークル　ミーティング　コンパ　パーティ等何でも（会場費無料）。シャモニー＆サンモリッツ」とある。この通りでは、かつて喫茶店を二つ営んでいた夫婦がいた。しかもわずか二軒隔てた場所である。夫が切り盛りするシャモニーの方が先で七八年に開店したが、現存するのはサンモリッツの方だ。

　店主の荒井章子さん（六七）によると「銀行から勧められるままに」二軒目を始めたのだという。それだけ景気がよかったということらしい。名前はスキー好きのご主人の命名。シャモニー（フランス）は一九二四年に開かれた第一回冬季五輪会場で、第二回がサンモリッツ（スイス）だ。

「ここのウエイトレスは代々、美人で」と言うのは、サンモリッツに居合わせた関西大学落語大学事務長の爪田家氷太刀（つめたや・ひたち）さんである。「シャモギャル」「サンモ漬け」という言葉があるという。

いまも落語大学の学生が集まるサンモリッツ（左から２人目が荒井さん　右端が爪田家氷太刀さん）

　関大では落語研究会の部長が落語大学学長。一九六三年に誕生し、いまや上方落語協会長を務める桂三枝さんが二代目学長だった。半世紀近い歴史を刻む名門サークルが、この店をずっとたまり場にしている。

「若い人と話していると元気がもらえる」と荒井さんが、昔からのノートを見せてくれた。学生サークルの数百人分の連絡先が詰まっている。いまも変わらぬ学生と学生街（の喫茶店）の関係を見つけてほっとしたところで、お後がよろしいようで……。